

全く性質の異つた彼等特有のものを發達せしめ建設したのではなかつたのである。従つてその根幹たる漢文化が、接木の枝にも譬へらるべき彼等の發達した文化の上に有する活力は非常に強く、如何にこの力を滅殺しようとしても效の無かつたことは、例へば金の世宗の大努力を用ひた漢文化の抑壓と女眞文化の保護政策とが、大した結果も擧げ得なかつた如きに依つても知り得られることであらう。

蒙古族と漢文化

しかるに蒙古族の漢文化に對して採つた態度は、一見不思議ともいふべき程に從來の例と趣を異にしたところがあつて、格別これを崇拜しこれに同化しようとはせず、どこまでも彼等自からの文化に執着し、却つて漢人等をしてこれに同化せしめたところが多かつたのである。今詳細に互つてこれを論述する場合ではないが、例へばその言語・文字・風俗の如きについても明らかにこれを觀取することができる。

一體言語は國民精神の顯現であつて、その混亂滅亡は即ち國民精神の混亂滅亡を意味するものであること、これを當時、契丹語や女眞語の運命において認むるがごとくであり、近くは重ねて滿洲語の場合においても證示せられるところである。しかるに蒙古族は元朝を漢土に建てた後においても、一般に漢語の修得に意を用ひず、政務は不便を厭はず、要に應じて舌人を使用してこれを辨じた。文字においても同様で、漢字の使用は彼等としては漢人に對する必要上からこれを認めたことで、自からは新たに西藏字から作成した國字もしくは古くから用ひ馴れたいはゆる畏吾字を用ひ、漢人に對する詔勅の如きもこの國字で漢語もしくは蒙古語を書き、漢文をこれに添附するのを